熊谷蓮生一代記

五

L289
7

慶應二年
寅十一月求之
播作郷岩川村
稲若保六

埼玉県立浦和図書館
S411733
蔵書

02897

熊谷蓮生一代記巻之五

目録

月輪禅定法然上人を招請之事
并ニ蓮生坊昇殿を許さるゝ事
法然上人降松袖子物狂之事
并ニ蓮生玉琴に敦盛の道を送事
玉琴親子敦盛を夢に見る事
并ニ熊谷に敦盛と逢実石碑之事
玉琴親子教化之事
并ニ御影堂扇盗腸之事

熊谷蓮生一代記巻之五

月輪禅定上人招請之事
并ニ蓮生坊昇殿許さるゝ事

同年秋の頃月輪禅定殿下へ上人御法問に招請ありて蓮生も供奉して参殿しける。上人是を停めんとせしかども世にすぐる曲者なれば中ゝ思ひ[illegible]ともせず其侭に随ひける。則上人ハ殿内へ入せ給ひしが蓮生ハ月輪殿の沓脱に腰掛て様子を[illegible]待ゐたるが奥にハ法問の声幽に聞ゆる。蓮生ハ[illegible]なれバ。[illegible]儀の時こそ僅の言葉も有べきに[illegible]入させし上ハ師の[illegible]も同じく何の[illegible]ならん。[illegible]へ推参して随身せんものと思ひしに師の[illegible]もなれに捨て置んも無礼なるべし何とぞ奥より

やさしく様よせんと方便をめぐらし。悪く実ある様よ独言して申しけるぞ
厭離穢土欣求浄土と。仏の教要するハ。穢よ穢土程[illegible]の
あらし宗法の如きよハへども。位なされしで咄と読ませ。極楽一定[illegible]
此差別あらんと。ある契りよ[illegible]りされバ。禅定殿下是を咲[illegible]六八行者
なし聞召れバ上人差あれて熊谷入道[illegible]て武家の
よりゑる今道心その後しが。捨て御殿を付添と仰けるぞ
月輪殿もかつて学及ず熊谷なるもバ優しくも思ふる仰られへ召し
仰れて御使を奉る。蓮生一言の式台もなく。大床をとく[illegible]
ゆきハ月輪殿へ参る。扨ハ蓮生坊そのう。我も御尊[illegible]これを
とあれバ綱よせてハ。各別と[illegible]我[illegible]師の上人の説法の座[illegible]
[illegible]極楽浄土之。往生[illegible]下と[illegible]

独りゆゑなる因果の道理ハ。果報程よしと生れて忽ち前世の悪業など
許さる果報を残すやうも。一念仏の行よ帰せんハ。いかでか此式
遂んと。道人耳目を驚かしてぞ覚へける

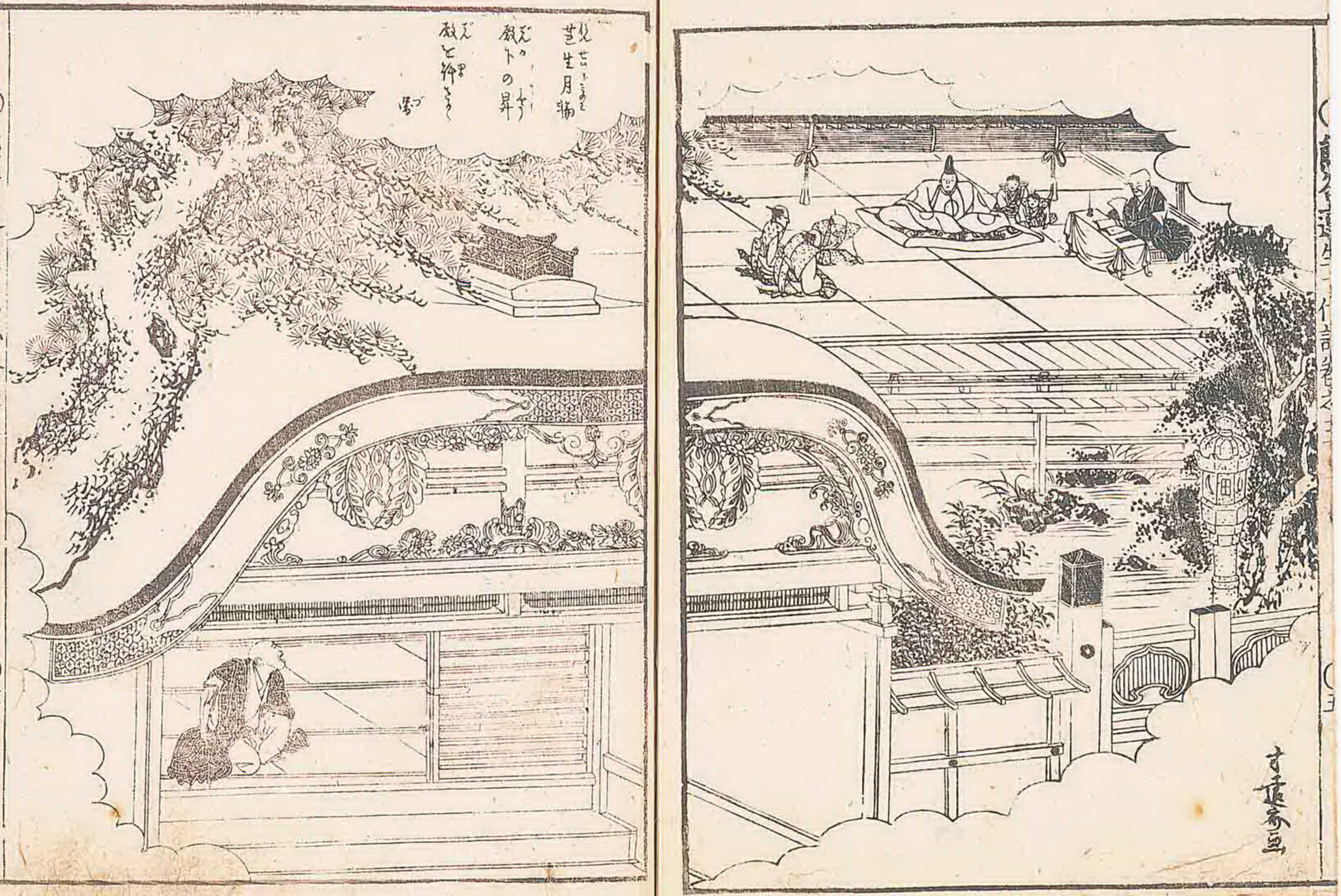
法然上人須磨にて物語之事
并ニ蓮生坊敦盛の菩提を弔ふ事

起信論曰。諸仏の法ハ因あり縁あり。因縁具足して成弁すると。
されバ出離を願ふ人。順逆の二つあれ共よ縁となることぞ。仏縁あれ
ども縁よ逢て生ず。さても蓮生坊ハ。先年一の谷にて敦盛を
討し其の守とぞ。玉琴姫の約束を思ひて後さんとあへ[illegible]
べき様もなく。殊よ家来時[illegible]の命をうけ[illegible]上総
都よ止り平家一族一門の小児までを。ことごとく捜し

出して殺害しけれバ。定て其骸をも逢るゝか。よし弔ふるとても中〳〵それとハ知まじと云へども人の口ハ片時もし洩る隙こそハあらざる。然るに上人の庵室へ日毎に八才ばかりの童。乳母のつれ来るを出合憐浅からざりしが。ある時来りて帰りし後。蓮生上人にむかひて。あの童ハいかなる人の子ぞそひぞやと尋ねられし。上人答て彼の童ハ御房に縁ある者なりと何なるに蓮生入道ふしぎに思ひ。驚き安じて若や敦盛の縁りにてもある児なるやと申けれバ上人あれこそ無官太夫敦盛の児なりと仰を聞て。扨ハ按察使資賢卿の息女玉織姫の児ならやしやせん。上人猶ぞや知るあふるの涙。押流す人ハ

沙汰もしあつかふべしと信ありける小蓮生一の谷にて敦盛より道の守を預りしが密に其母と尋て相渡べしとやられしが上人さあらバ助力に及ん明日童が母を招て此方にて渡さるべし。夫より童がて成るに借しせまゐらせ哉比叡山に登りし時。文治二年の秋の末加茂太神宮へ参詣せんと一乗寺の降松（俗に一条の降松といふハ非なり 載バ太平記ニ降松とあり）辺を通りしに大勢の人集りて摑く取なるゆゑ泣しげしつふをさゝて立去し跡に二歳計と見へて綾の小袖に包たる捨子あり。見る人々の申けるハ誰しらざる子なるが拾ひ育る者ハ安けれども若平家の子なりなバ後日ハ咎めありといふて誰取上る人もなし。然に三子年に一度嘆優哉なりけるを

稀にして此人界に生を受る者を。いかに世の恩あればとて。出家の身をして又捨ては無道ぞ。人を救ふ出家の業と云誠に彼ハ不便さを又捨るに忍びず。衣の袖に抱つゝ近在の家を尋ね乳母を付て養育す。然に撫育ハ二歳より善く生立に随ひて才智常は事に越されば人々情を感ぜざるハなし。我山を出て此庵に移りて日毎に乳母を呼寄て訓誨に随ひ読経をも増りて日々に学びをさせ。良く出家にせざりしに。髪をも剃ず長ずるを待なり。又彼が親ハ乳房の母乃身を殺る事なれば。幼童を嘆しと人こそ孤童丸とよべど。彼もまだ知ずして。然るに去年幼童七歳の春。清水寺の地主の桜を乳母がつれて見物に行しが。京中は老若男女袖をつらねて花の枝を翳し戯れ遊ぶ其中に六七歳計の童は父母の双方より手をひかれ行を見て。幼童ハ乳母にむかひ。あの子は左右に引かるゝたる二人の男女ハ何人なるやと尋ければ。乳母答てあれこそあの子の父母なりと云を聞より涙を流し。さしも花見るにもなく。はやく帰らんといふに。色々と進むれども。ついに顔に憂色なくつと帰りて房に来れり。幼童我前に畏りけふの花見には其の中に年の頃我に似たる童を父と母とが両方より手を引てありけるが。あれでこそ睦しき事も父母ありてなれ。我身には父もなく母もなきは如何なる因縁にやと涙ぐみくれて問しかども。我も涙をせきかねて衣の袖をしぼりしと



蓮生月輪
殿下の昇
殿を抑さへる
図

寸延斎画

歎く。乳母ハ元より側に附人共〻涙を流つゝ捨物ともいへざりしが。渕に洞を隠し。誠に不便なる糸の縺るゝ如く。後に父母ある者ならバ事の我衣の袖の包んや。ゆるふとハ小児といひなす事も知せざりしが。今ハ諸て叶すべし。且かし文治二年ハ秋の末。一寺なれ澤松乃邑して拾ひ乳母と称して養育せしことを續て語りせバ子細を聞より驚愕へ深く悲みて嘆く其日より心あまへる止ずして寝食も望ず身体次第に痩労れ養事にて補へども更に験もなく。日を追て募るの気はしバ。纔情なる元より病痛なれバ。まんとと思みけん百薬も捨んとなりぬ。其慰もなき父母なりしも思ひまして。終にが乳母に向ふ事ハ常に教育と整する人の中に。誠が父母

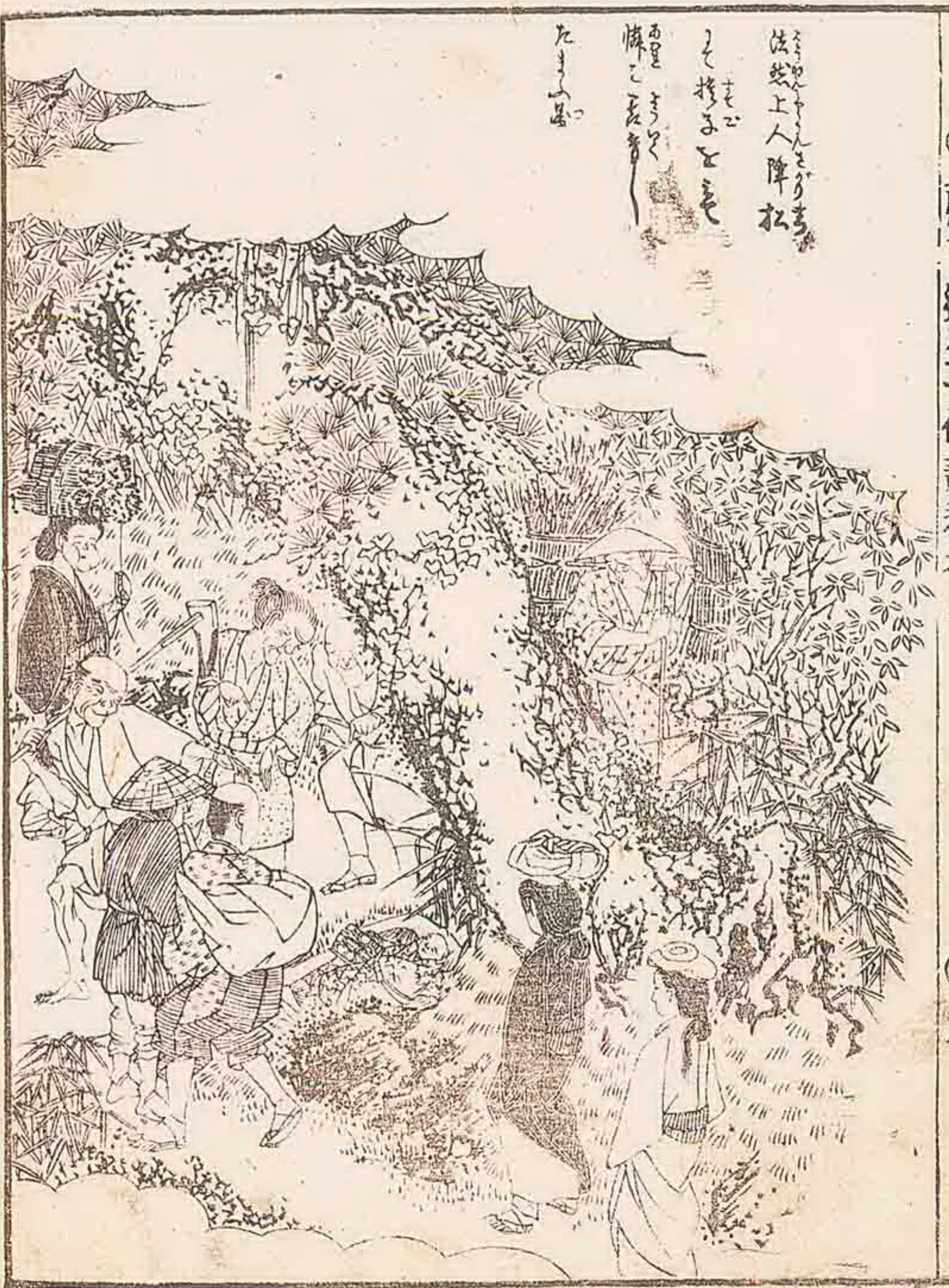
いふべき親しみハなきや聞に。乳母いへく。年来上人御説法の時。参詣の中に二十餘の女性。此かみを墨したるて。実の母なれど又此時子も髪を剃りて母の如くともなふ縁ども久しく上人の御説法なけれバ。打絶て無念やさん女性ハ俗家にても猶なさんぞ。斯く清んとぞ思ひしなり。つゐに聞なき由へ。何れ人とも諸人の知るなき問ひましてもなくいかざまを斯かなんやと涕をすすりて。予が遁世の説法にて初而読経の席にて融解にて向ひ。一家寺れ捨子の如き委細を語れハ其子を年七歳になりて。父母を恋慕て病と成り衰へ仰ぐは。今ハ命も旦夕に迫るの苦や融衆の中に父母を嘆かもききする人あらば。命を救ふの功徳あれば包ず打明ても

洞と共に語むべし。聞人とも涙を催し。哀なるかな行人の子とて有らん子孫とても知人なく告まへていひ合しが。是知られし人もなく。仁義絶たる人にハ深く下向しける。其後に女房まで人留りて。我に対して。自らこそハ其子の母なりし子を捨し其日より上人の御教に包まれしとぞ語り。人拝ざ世中に隠れなき上人に拾はれしハ。身が悦びその子の幸に縁なれば上人を佛神とも云ひ。毎日〱に手を合せ。哀せぬ日とてハなかりし。文治二年の秋より建久二年の冬まで六とせの春を過めまでも。其子の母と他力念仏にて御礼申されハ。人の報にもあらねども世を思ふ身ハ是非もなく。密く過させし年月の其御恩ハ尽きせねど。いつの世にかハ

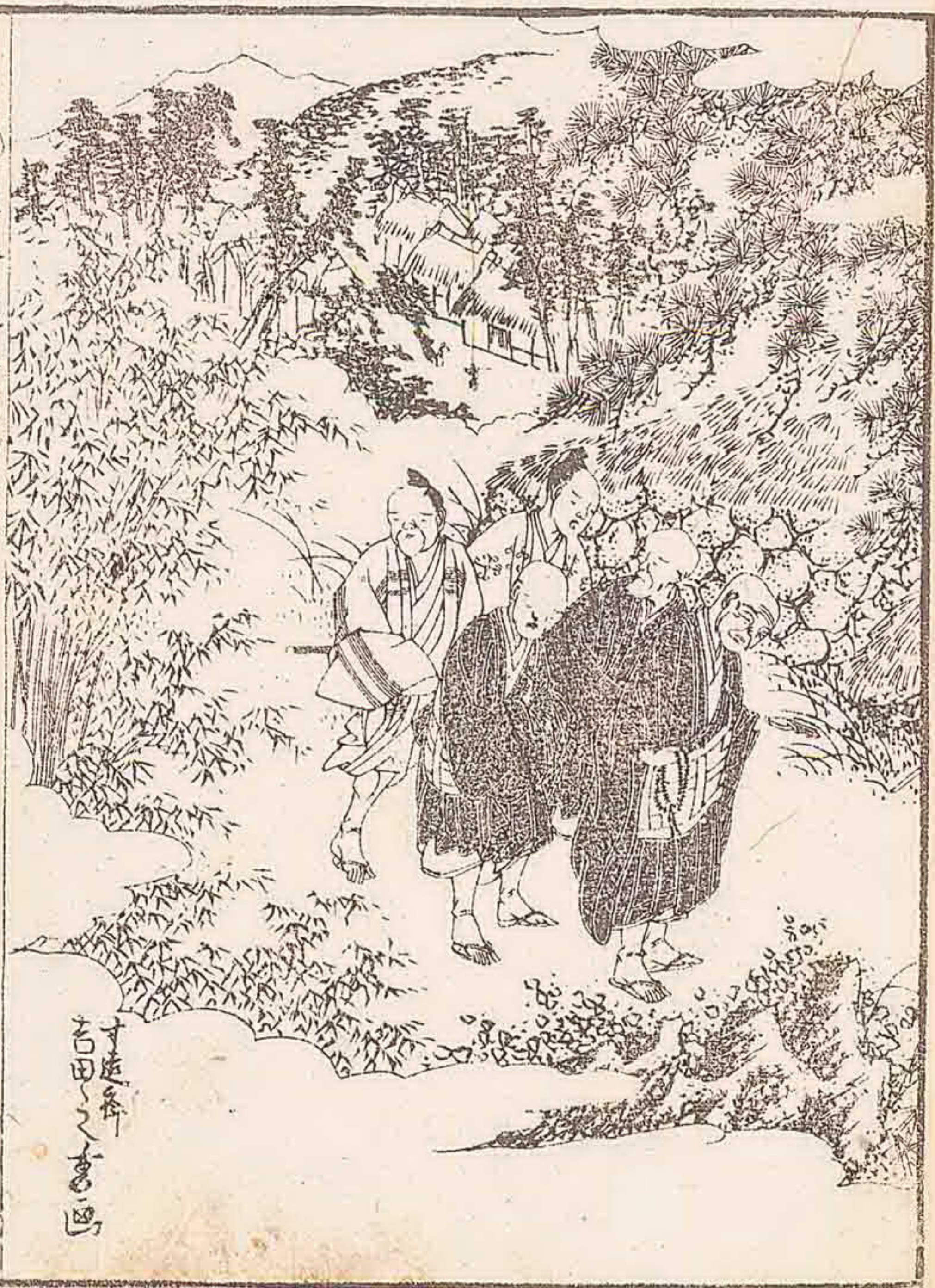
報じまいらせん。是迄の誤りハ御慈悲の眼に見捨給へと涙にくれて悦たる体隈なく痛りしく。扨ハ童が母なるかとよ逢て彼が心を慰めんと仰られしが。頓て病の床にまかりらんまだ痩し寝姿に胸を出されくる後を押て放童栽て来るを汝が母なり。何とかに縁くぞと頭を撫て男泣に泣給へ抱とりげ。扨も久しや何として此程ハ見へ来ハざりしや。我を痩くなぜしぞ。母に我身の母と名乗しだ。なぜ早く知らせぬハなぞや。真の母ぞとも知らずして今日迄過せし悔しさよ深く起て母の傍にすり寄て顔つく〲と打守り涙にくれて有さまハ見る人々も袖ふさぐり。母ハ兎角の詞なく。いだき抱へて泣流めり涕や親しくなりしことなる。此縁の喜びにあまれ致童

継々甚之局を実の母れぞく親しく其の乳母は抱擁
是とハ知ねど自然ふ通ずる血脈の情く我も恩愛止めがたし
母ハ幼稚をそだてめ。名ふ乞をそれるふ母ぞとも知せざる其故ハ
父母ともふ世ふ捨られ深く世ふ身をつゝみしも日陰の人の
稚子の養育ふも障りありて。是非ふ及ばず捨られしを上人の
御慈悲もて是迄成人ありしそ。育てられ身のうへなり。父子
よりハ母もあれバ心つくひとつて全快して病悩を遁
やれしほ讒言放蕩気色を改めさも嬉しげふ起直り。かく
母子ふ名のみ合得る人ハ。何かんふ妙なるをみれバ人まで父
上ハ何方ふ在ぞやと。其より母ハ涙を流し。其父上の世ま
あらぬ折としを母が語べきか。今ハ此世ふ在まで。猶バ父上の

御名ハ何やせしぞや。いやそこの父上の御名ハ子細ありて今ハ
露顕ふ申されずまゝて待受すべしとよ。放蕩御勘当の子細
有ければ。大恩の師の前もて父の名を隠すも只徒く世ふ流され
れる身分となり頓ぢふ縁ぞ。上人今此時よ知りて。なんぞ浪ふ
んや。いかなる人の子ふも世よ源空が弟子たらんまハ何事の子
細もおし包を語きかすべしとのたまへバ。猶しも申されて
其中ふが父上ハ平家の一門修理大夫参議経盛卿の末子
無官大夫敦盛なり。一の谷の合戦ふ熊谷次郎直実ふ
いふ武士ふ討れ給ひし。幼稚を残りなく言葉をのこし
りて。それよりの事共も母を力ふ生たち全快しまれども。母
役なれ身なりて。一条万里小路の人の情をうけてひとり送る身



法然上人（ほうねんしやうにん）降松（さがりまつ）にて捨子（すてご）を見
憐（あはれ）み養育（やういく）し
たまふ図（づ）



寸延斎
吉田〻之書画

あれバ我子を出家するならバ九業にあれども親母が宿にて生立しと親に継せ玉ふを守て意を聊く遺言も主。我の心をいひ合て都をあげなく胴によくれ主あり。親類よハ母妻の両人を上人の御庵室へ召連。入道に引合玉へバ。蓮生坊親子れ人に対面して互し言葉も寄らまりけん。其ハ熊谷次郎直実といへる者なり。今ハ入道して蓮生坊と名乗。先年摂州一の谷にて敦盛卿を討奉りし時。我身未熟なりありて。御母君を見。さぞ悲く心を責せしが。縁有ると知ずして今日まで過せしに我等も因果なく只今敦盛卿の御母を預りありき。懐中より蜀紅錦に如意宝珠を織たる袈裟を出し。此守ハ敦盛卿の御出まで肌につけ玉ひしが。御方へくれよと頼玉ひしなれバとて。玉織姫に渡されバ。一同袖をしぼり覚ある守なれバ。喜びまた悲しみして嬉しくも又悲しくて胸波てぞ居たりしが。良ありて親子れ人入道が顔をとくとうち縁ありの事を聞しなバ。上人まも察たまひてまく両人へ生害をとゞめ。親子の敵なれども。嫉く恨るみなされ。其入道が討ずとも。平家の人々皆西海の水底に沈む。何とて敦盛一人助られんや。又経盛をはじめ一門の人々壱人も残りなく海底に死玉へり。其中に敦盛ハ熊谷に討るればこそ後乃菩提の其守と今又手に入けるも。又熊谷も敦盛を討たればこそ法師となり。菩提を吊ひ。今ハ又敦盛のみならずや。然バ熊谷ハ敵にてハなく。大善知識の首生坊なの

くんバ敦盛ハ此現いつの世まで修羅の苦患をまぬかれん現世を殺ハ纔一年の命を奪ふ。後世を助るハ永劫の苦を救ふなれども法然上人の弟子となれバ今より親子とも蓮生法師を知識となして。敦盛ハ菩提を弔ハれまし。幸明なる御出家化より出入ある親子もわかれけ。其後ハ蓮生法師を知識として朝夕の勤行おこたらざるハ有難かりし次第なり

玉琴親子敦盛を夢に見る事
并ニ黒谷敦盛直實石碑之事

扨も其後建久五甲寅年二月七日ハ敦盛の命日なるぞ。玉琴親子蓮生法師同道して摂州一の谷の最期の場所へ参詣せられけるが。先年熊谷敦盛ハ死骸を土中に埋み証に松を植置たりしバ其頃わかくの緑りなり。古屋野の原をそことして是迄も元暦元年甲辰より建久五年まで満十一年を過けれバ鬱々とみどりと見ゆるがごとく。植し小松も年経ぬれども。いつまでもしげりて玉琴親子ハ悲しさ弥増て其中に親子ハ涙に咽びぬれども蓮生ハ俗の日数ぞしくしへども元親子に存命ありし比ハ親子共に心もうし旅路をあゆみ人家ある方を尋ねて休息せんと思ひ急せてあゆみけれども。其中ほどハ方角たがふも別にかかりければ一宿して松明をともしてあらんとなりし松のもと三人が座してあかすまでを見まもせだ。然もむつかし日の光見へけれバ。定めて人家あるらん。かれ是ゆくり一宿をもとめんと。おもふま

なりけれバ。茅葺(かやぶき)の一ッ家(や)ありて。其主(そのあるじ)ハあらじとおもひしに

へど。何にもせよ夜露(よつゆ)を凌(しの)ぐ便(たより)なれバ。立出(たちいで)帰(かへ)りを待(まち)て一宿(いつしゆく)

と頼(たの)まんと。三人一所(いつしよ)に其主(そのあるじ)の帰(かへ)るを待(まち)居(ゐ)たる。設(まうけ)ありて

るが。なんぼ夜(よ)も更(ふけ)ゆけど見えし帰(かへ)るもなく。何(なに)ごゝろもなく

敦盛卿(あつもりけう)身(み)にハ甲冑(かつちう)を着(き)たまハず机(おしまづき)にかゝり。其主人(そのあるじ)ハむかひ

書物(しよもつ)をとり出(いで)て扇子(あふぎ)を持(もち)ながら。つくづくとまもりゐたまひしが。老僧(らうそう)

すハ汝(なんじ)が得(え)たまふ所。秘蔵(ひざう)せられし後(のち)もかゝる誠(まこと)にまもりたまへれ

押(おし)いたゞきひらき見れバ。面(めん)にも輝(かゞや)く日(ひ)の丸(まる)あれバめづらしく

おもひて打(うち)ゑましく眺(ながめ)入(い)るおりしも。何処(いづく)ともなく。人る乃おと

の頻(しき)りにきこへけれバ。敦盛(あつもり)顔色(がんしよく)忽(たちま)ち変(へん)じ大(おほ)きに驚(おどろ)きたまひ

さる事ぞ。時刻(じこく)遅(おそ)しと立出(たちいで)んとしたまふを。今暫(しばら)くと直実(なほざね)が

て鎧(よろひ)の袖(そで)に縋(すが)るを振払(ふりはら)ひ出(いで)んとあせりたまふを蓮生(れんせい)

抱(いだ)き側(そば)へ立寄(たちより)懐(ふところ)さぐると打(うち)見る内今を名残(なごり)し

気(け)もなく消(きえ)まさ夢(ゆめ)と見えたれバ。其身ハ未(いま)だ申(さる)の刻(こく)。白日(はくじつ)

青天(せいてん)とみゆるに。小松の下(もと)に三人が忽然(こつぜん)として眠(ねむ)りたる。扨(さて)ハ

夢(ゆめ)みて有(あり)しやと。蓮生(れんせい)夢(ゆめ)の子細(しさい)を語(かた)りたれバ。おやまにも同じ

ゆめ見れバ。怪(あや)しさを加(くは)ふる間(ひま)に。割(わり)ばかりなる扇子(あふぎ)ありまさだ。

ひろげて捲(まく)りみれバ日の丸の陣扇子(ぢんあふぎ)なり。さてハ夢(ゆめ)の中(うち)に父(ちゝ)

よりみれバあやしき扇子(あふぎ)もちたまひしと押(おし)いたゞけハ蓮生坊(れんせいばう)も

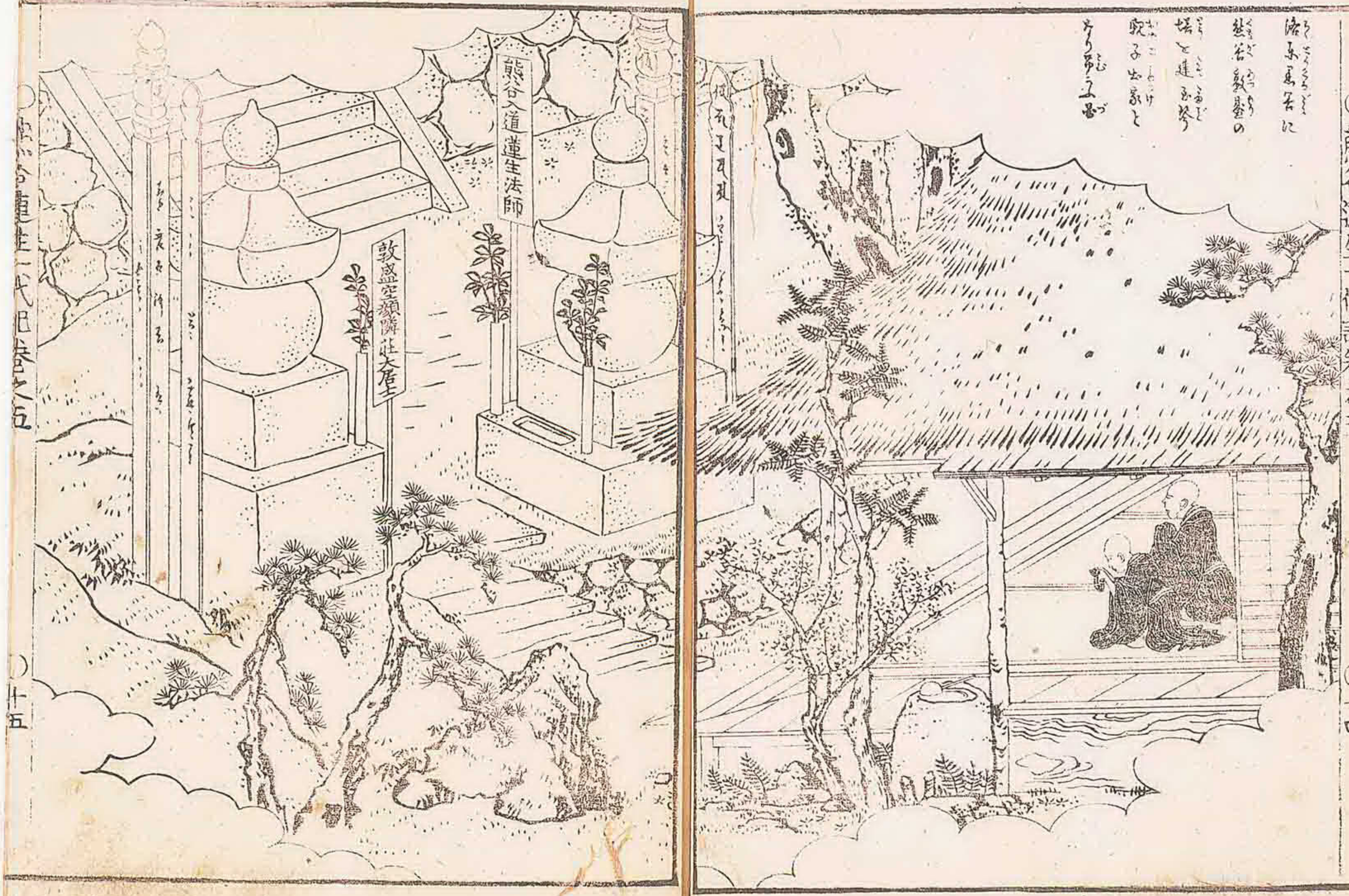
もろともにつくづくとして。後(うしろ)をみたまふに。纔(まつたく)にこれハ合戦(かつせん)の時互(たがひ)に

扇子(あふぎ)をひらきまねきよせたりし。持(もち)たまひし日の丸なれバ

うたがひもなき其時(そのとき)の陣(ぢん)扇(あふぎ)なり。跡(あと)にその段(だん)遠(ゑん)忽(たつ)ハ。

のこしおきし入道が気象か。經盛卿へ送りしが。其中に御曹子は一たんむそと見えたり。既に十余年の春をおくりて此御曹子おしも給ひど。又修人の手をも離れずして今まで念にありつるが。のみしきさよ。是を持人で能く霊魂の心を深く染むべし。とぞんずれば。重盛は父上の御形見と秘蔵あるべし。倩おもふに此秋は下りを敦盛乃亡骸を添へしありて。此松こそは其時植し小松なり。猶も此人此世をと求め給ひ。遺子が世へは。敦盛乃霊魂よりし火れども。あらゆるを学ぶべきありしはたれど。回向なすべしとて。法施をさゝげ。上人同音して終夜念仏して。小松のもとに夜をあかし。終日に回向して明れば松の名残の涙を濯ぎ。其より故郷にかへりて後は此所

石碑など建て。今の世までも敦盛は御墓所と諸人の手向草とはなりける。抑も上人ハ上人の御前に出てより此地乃往昔の遺迹一々語りおはりぬ。上人良久落涙ましく宿縁には尽きせね。とぞなり。蓮生が孝ぞし親子はおのひ真実なりしば。霊魂なるべし。しかなりて上人の心は移り佛意の大悲霊魂と引てふかくさとりぬ。不才なれども信心を励して追福を修すべし。上人の答は趣を詠ずるに。敦盛いまだ修羅の苦患を遁れず。人々なるは喜は悲縁因縁の時刻遅しとぞありける。知らるれば念仏を観念にあらずし。修羅道の身体。因縁にて[illegible]あはれを知らしむるなり。哀れなるかな明日より一七日を限り。懺悔同心に別時念仏を修して回向すべし。余念も精進


熊谷入道蓮生法師
敦盛空嶺隣荘大居士

洛東黒谷に
熊谷敦盛の
墓を建立参
親子出家と
なり弟子と号

修りおはして別時念佛とはじめ玉へば。所化弟子たちまで〳〵結縁に入玉ひ。頓て日数も満て。既に一七日の結願の逮夜に。上人をはじめ。同行同志よ精誠を勵まされて異口同音に高聲念佛經行けるもたゆみなく。八聲の鷄も告るまで。彷彿と見えし頃本尊より光明を放ち空中赫奕として人面金色となり。外には紫雲たなびきて異香薫じ音楽入耳おりから西の扉をひらけば。紫雲の間に聖衆来迎あり。御氣色歴然と顕れ玉ふ。随喜感涙心肝に徹し現身往生の心地あるとなん。此霊の得脱遂らして。勤修の行人は信心を決定すべし。是上人徳行の故へなり。信ずべし仰ぐべし。其のち蓮生坊。親子の恩。親類の命日に

況して殺すべからず与ふべからず。人の貧福は宿因によれば必ず貧を厭ふべからず。富貴を貪るべからず。後世の志し忘せる者は貧福に関なし。唯生ては念佛の功をつまん死しては極楽の往生を遂んとのぞむべし。今生はいづれにもかくても念佛と申安き様に得るべしと懇に仰ふくめたまへぞ皆々有がたく心肝に染けり。俗縁のゆかる者は妻子にも孝おや子の者は身にとりては何れとも有がたく存じ奉りしにも年老若き女の身にして。世の交も心うく候へばたゞ心うく乃御慈悲のもりを見あまりてまゐるべし。何事にも障りなき身となりて。後世の勤を励まん為にして申されける。上人ならびを御まん足ありて又殺生の中よなるゝ佗の額き有がたく感心

住ぬ。但しそれがしも髪をおろさせしめて上人の御剃刀を頂きて御弟子となり末に加へ下されとぞ。後世の事おもひ師の御勸學を聴しきせまほしけれと願ひ申上ければ上人も其志の神妙なりしく母子共に御剃刀を下されしを剃刀を遂に出家し給へば入道則母子の頭を剃られし。母を生蓮坊如佛。又教童を法信房盛蓮と法号を下されける其後蓮生がはからひにて武州熊谷より彼助を得て五條の南東京極の西蓮華院の王阿上人へ如佛が父資賢卿の内蔵もありしが彼院の傍に居を定めて父教盛が形見の品をわけて庵をむすびて渡世し。母子ともに佳念仏を励みて後生一大事の勤怠らず。又如佛尼は念仏の同行を催して。毎月別時念仏を修行せしける。世の人

摂州一の谷にてなくしの廟墓なりがさねまゐらすとて上人の御庵室（黒谷紫雲山金戒光明寺也）の東なる山腹に敦盛の石碑を経営。上人より空願蓮清居士と法號をさづけて石面に記しその南に我が寿塔を建る（元暦元年二月七日行年十六才）。亦草庵をなされ脇檀には敦盛の木像を安置し。朝夕の回向怠りなし。又毎月忌日には親子共に参詣して。蓮生坊法力に佛名を唱ひ。別時念佛を修してあつまりし并に一門の人々の菩提を弔ひける

玉琴親子發心之事

并に御影堂廟濫觴の事

あるとき蓮生坊と教童母子ともに上人の御前に参りて仰られけるは教童が母は便りなき身にして他人の情にて

命を害ふハ定めて罪業の多かるべし。万事かんにんしてこそハ念仏の信心も入て積りたるべし。志かれど母を安く養ん事。子まれまでもと思ひて放蕩成人せば。出家させんと思ひしが今に於てハ無用のことなり。いかにしても渡世の便あらバ母を養ふこそ出家の功徳にも勝まる事なるべき。並せても叶ぬるあひあれども。放蕩ハ成人まで助成の為業せらるべしと約しけるにぞ。入道より我も左こそ存ぜんぞ。且今ハ本国へ申つかハし悴小次郎直家ことより扶助いたさせ。いかなる所までも便候べく住居して母子ともに世を送られよと申ければ上人大ニ喜悦ましまし我よろしく計ふ。備中にある陣扇ハ渡世になるべし。母子共ニ身命を養ふ事ハ父なり。父のかくこそハ身を

扇屋の尼妙源と号す。又上人御入滅の後ハ法然上人乃御影像を書せてかけおき。朝暮礼拝志かさず。扇を渡世としけるに。世挙て御影堂扇といひあへり

如仏尼母子共に上人の御教戒をよく守り信心を厚くして念仏の功積り母の尼ハ承元元年己丑の誕生にて。寛喜二庚寅年六十二歳極楽往生文治己巳年に生まれて四十六歳を一期として。親子同年二月十五日なる上人の御斎日にて。高声に念仏巳の刻より始め午の刻に端坐合掌して。大往生を遂る。誠に奇なるかな。其後遺命によりて五條通御影堂新善光寺ハ檀林尼庵の御遺跡にてはじめハ尼寺なり。王阿上人より男僧となれり

亦同。王阿上人修業あり。一遍上人の木像を当寺へ移されし日 後の御影

西へ行しるしとなりて奥ならん善峯寺にうつる月影　王阿上人

平敦盛の室按察使資賢卿の女也。新黒谷の側に庵を卜して如佛尼といふ或時王阿上人朝夕の庵を過りてあるに如佛尼自ら柿衣を製して蓮覚阿弥に加持させて王阿上人の病患を祈りしめしにふしぎにさめて平愈せりとかや其僧庵をおとろへて。程なく山城名勝志にみえたり

○山州名跡志曰。下久世の南寺戸の北に池あり其所を敦盛塚といふ（敦盛の墓）是も一男延生は直実の弟子として後源氏より平氏の菩提をとはせんとて世にふし堪ずして二尊寺の下松に於てとふ

熊谷蓮生一代記巻之五終